

様々な立場、視点からハチ公にまつわるお話をいただいた後は、西村亮平先生(日本ペットサミット会長、東京大学獣医外科学教室教授)の進行での、質疑応答タイムに入りました。



ーハチ公を解剖するに至った経緯や理由などがあれば教えてください。解剖するというのが少しかわいそうな気がしてしまうのですが……。

中山先生:80年以上前のことなので、そのあたりのことについては何も記録が残っていません。解剖をされた先生方も皆さんお亡くなりになっていますので詳細なことは分かりませんが、解剖をすることで死因を究明し、その後に動物が発症するいろいろな病気の研究、治療などに活かしていくのが病理学者の仕事だと私自身は考えています。また、先ほどもお話しましたが、解剖して臓器を保存しておけば、後に顕微鏡で調べてみると新しい事実が分かっていくといったことがあります。80年経てば、医療や獣医療も進歩していますので、進歩した技術を使って昔の標本を見ることで、さらにいろいろなことが分かっていくのです。そのようなことから、解剖は非常に意義深いことだと思っています。

西村先生:病理解剖は医学の発展の基礎となったものです。病理解剖が行われていなければ今の医学の存在はありえない、というものです。

林先生:記録に残っているところだと、当時、民間の著名な犬の研究家だった斎藤弘吉という方が、ハチ公が死亡したら東大の病理で解剖してはく製にするという手順をすべて決めて仕切っていたそうです。死亡後に放っておくと臓器が腐ってしまい、はく製にすることができなくなってしまうので、死後すぐに東大で解剖が行われました。解剖後、臓器は東大に残され、他ははく製にするために国立科学博物館に運び込まれました。ハチ公のはく製は3か月という短い期間で仕上げられ、死後6か月くらいからは展示を開始しました。

ーMOFU MOFU☆DOGSの動画がいろいろな意味でショックだったのですが、どのくらいの製作費がかけられているのでしょうか。また、財源などもご存知でしたら教えてください。

相澤さん:大館市を中心として4つの自治体が連携して作っている地元の観光団体が製作したもので、映像はあくまでも海外向けのものです。インバウンドをどうやって秋田県に向かせるかというところから始まっている事業になります。製作費は2000万円です。映像に出ていた3人の犬は、アイドルグループのMOFU MOFU☆DOGSという設定で、アイドルグループが歌って踊って秋田県をPRするというコンセプトで作られたそうです。台湾などではこの動画がとても人気で、それが受賞につながったのではないとも言われています。

林先生:いま、海外の人のネット検索では、fujiよりakitaの方が7倍くらい多い状況です。それには様々なことが影響していると思いますが、動画の成果も見事に出ているのではないかと思います。とにかく、日本の象徴である富士山を上

回る検索数であるのは大変な出来事です。

ー昭和初期のころは、犬が気ままに街を独り歩きしていても、捕まえられたり連れていかれたりしなかった時代なのでしょうか。

林先生:私の田舎の富山県では、1960年代でも犬の独り歩きはOKでした。ですので、東京でも1930年代でしたら問題なかったのではないかと思います。しかし、ハチ公は結構いじめられていたようですね。

塩沢先生:ハチ公は何度かイヌ狩りにあい捕獲されていて、当時の飼い主の小林菊三郎さんが迎えに行っていたという話があります。

西村先生:私が子どものころ九州では、近所を犬が当たり前のようにウロウロしていましたよ。人と犬の長い歴史を考えれば、犬が外を勝手にうろつかなくなったのはごく最近のことといえますね。

ーハチ公の同腹や血統の犬は残っていないのでしょうか。

塩沢先生:ハチ公は斉藤家で生まれた4頭のうちの1頭で、一番元気そうな子犬を上野先生に贈ったと言われています。実はハチ公の素性が明らかになったのは、ハチ公が死亡した後なんです。斉藤家でも、まさか10年も経ってから自分のところで生まれた犬が有名になるとは思っていませんから、いつ生まれたかという記録も正確には残っていませんし、同腹の犬についても記録は残っていないのではないかと思います。

ーたまに、メディアで秋田犬が咬傷事故を起こしたというニュースを目にすることがありますが、地元秋田の方々は、秋田犬の性格をどのようにとらえているのでしょうか。

相澤さん:秋田犬には過去に闘犬の血が過去に入っていますから、危険な部分を持っている可能性があると思っています。先ほどザギトワ選手が秋田犬を欲しいと言っている話をしましたが、それについて秋田県知事が心配していたのは咬傷事故です。もしも秋田県から贈った秋田犬がザギトワ選手の腕を咬むなどしてしまい、ザギトワ選手の競技生命に何らかの被害を与えることになってしまったら国際問題になってしまうのではないかと...ということを実際に心配していました。やはり、秋田犬は簡単に飼えるような犬ではないという認識を秋田県民は持っているでしょう。

林先生:秋田犬は過去に闘犬にするためにいろいろな洋犬の血が混ぜられています。ですので、現在日本にいる秋田犬にはどう猛さが抜けきれておらず、闘犬前の状態には完全に戻っていないと思います。たとえばの話ですが、こういうことがありました。おばあちゃんが秋田犬を連れて歩いているとき、うっかり何かにつまずいて転んでしまいました。その時ちょうど向こう側から自動車が走ってきたのですが、秋田犬は転んだおばあちゃんの上へすぐさま覆いかぶさったため、おばあちゃんは一命をとりとめたという話です。これはおばあちゃんを守ったという美談になる可能性があるのですが、オオカミ時代から受け継がれている基本的な本能が出たからだという見方もあります。オオカミは、追っている獲物が転んだときにはすかさず飛びかかるという性質を持ちます。日本人はどうしても美談の方にもっていくのが好きなのですが、この犬のエピソードについてはおそらく本能的な行動が出たからだとは私は思います。

塩沢先生:私は犬の専門家ではないので詳しいことは分かりませんが、ハチ公に関しましては人を咬んだことはまったくありません。喧嘩は強かったが、自分から手出しをするようなことはなかったと書かれた文献が残っています。ちなみにハチ公の耳が片方垂れているのは、ほかの犬に咬まれたためだそうです。

中山先生:実は今、ハチ公の臓器から DNA を抽出して、現在の秋田犬との比較をしているところです。80 年もホルマリンの中に入っていた標本なので、DNA 抽出をするのがとても難しいのですが、何とか少しずつ進めている状況です。性格を含め、DNA レベルで過去の秋田犬と現在の秋田犬の違いが見つけれられるかもしれません。

西村先生:このところ病院に来ている秋田犬は割とおとなしい感じがします。たくさん頭数が来ているわけではないのであくまでも個人的な印象になりますが、性格的にはおとなしい方向へ向かっているのかもしれないと思います。